

# 小笠原近海 中国から鉛

海洋機構など  
サンゴを分析 原子の重さで判別

日本本土から約1千キロ

離れた小笠原諸島（東京

都小笠原村）近海で、中

国からきた鉛の量が増え

てきていることが、独立

行政法人海洋研究開発機

構の谷水雅治研究員（33）

と東京大学海洋研究所の

井上麻夕里助教（30）の研

究でわかった。中国の経

済成長に伴う環境負荷

は、遠く離れた太平洋の

水質にも影響を与え始め

た。19日からドイツで開

かれる地球化学に関する

国際会議で発表される。

研究では、02年に小笠

原諸島・父島付近で採取

されたハマサンゴから、

直径10センチ、長さ1・5メートル

の骨格を取り出し、過去

108年間の鉛の含有量

の推移を測った。サンゴ

の骨格には、木に似た年

輪があり、海の水質を年

を追って調べられる。

鉛の量は1900年代

初頭には0・01ppm（ppm

は100万分の1）だった

が徐々に増え、60～70

年代に0・06ppmのピー

クに達し、それ以後は減

少。90年代に入ると増加

に転じ、0・06ppmに近

づいている。

70年代以降の減少は、

日本がガソリンの無鉛化

究員は「環境汚染といっ  
ほどの濃度ではない」と  
している。

鉛は原子レベルでみる  
と、重さが違う仲間（同

位体）が4種類ある。同

位体の混合比は産出地で

異なり、一種の「指紋」の

役割をする。中国産の鉛

は最も重い同位体の割合

が大きく、それを分析す

ることで中国の影響だと

判断した。（久保田裕）



小笠原諸島